柳田国男と石見佐次右衛門 ―『島根民俗』にみる佐渡の旅―

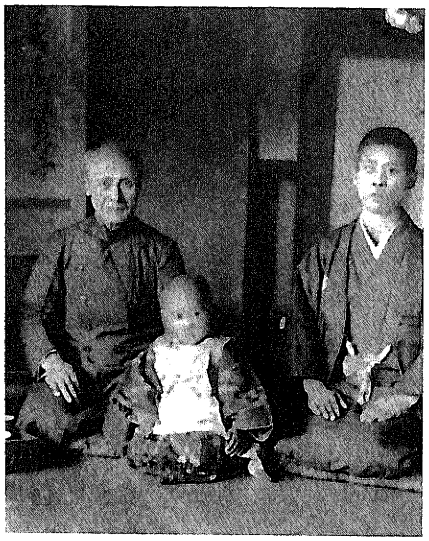
池田哲夫

はじめに

民俗学者の柳田国男は、佐渡を二度訪れ、「佐渡の海府」「佐渡一巡記」『北小浦民俗誌』(1)などの論考や著作を残している。柳田は佐渡にどのような関心を抱いて訪れたのであろうか。そのきっかけの一つは、後述するように柳田の貴族院書記官長在職当時、佐渡出身で貴族院の守衛として勤務していた石見佐次右衛門(通称　岩次郎　以下佐次右衛門と記す)との出会にあったようである(写真―1)。佐次右衛門は守衛を退職後、出身地の佐渡郡金泉村姫津(現　相川町姫津)へ帰り晩年を過ごした。柳田の二度目の来訪時にはすでに没しており、同家はその当時すでに廃絶したものと思われていた。

ところが、二〇〇二年(平成十四)の夏、佐次右衛門の玄孫にあたる佐一郎氏の所在を知り、氏と氏の母スエ子氏の配慮で、同家の仏壇や佐次右衛門の使用していたという部屋の戸棚等に保管されていた佐次右衛門に関する資料を拝見することができた。

以下、佐次右衛門と柳田との関わりについて若干の報告と考察を試みたい。

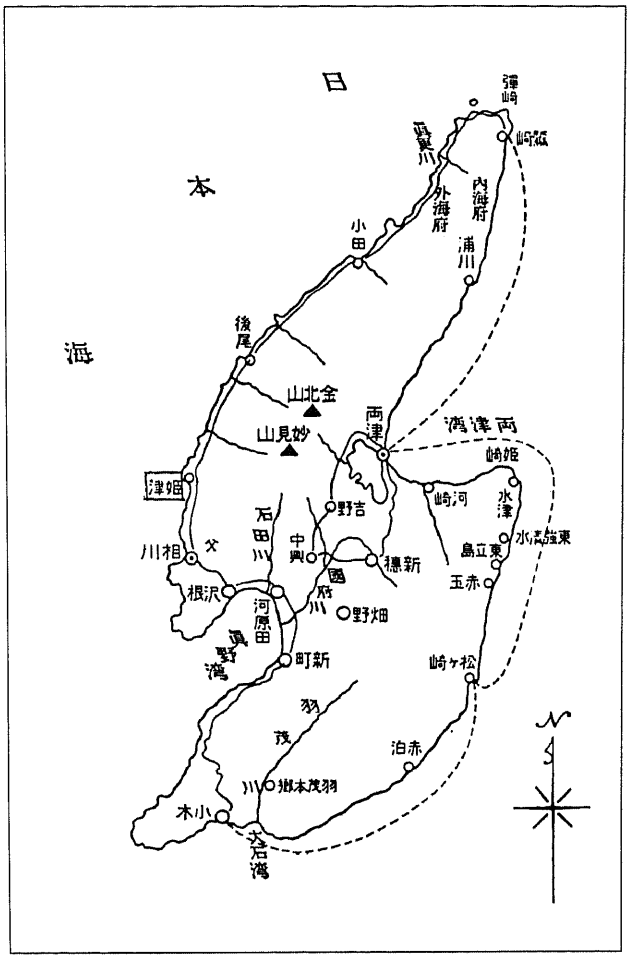


写真―1　石見佐次右衛門(写真左)
昭和初期頃
(石見佐一郎氏蔵)

一　『石見民俗』の記述

柳田国男が佐渡を訪れたのは、一九二〇年(大正九)六月と一九三六年(昭和十一)七月の二度であった。一九二〇年の旅では単独で佐渡をほぼ一巡し(図―1)、そのときの印象を紀行文的に「佐渡の海府」(2)や「佐渡一巡記」(3)に記している。二度目、一九三六年の旅は佐渡の民俗研究家の招請に応えて夫人を伴っての来島であり(写真―2)、講演活動(4)のほか佐渡の名だたる民俗研究家や郷土史家等と交流をしている(5)。しかも、二度目の旅で柳田は、当時交通も不便で、特段名所や観光地ともなっていなかった外海府の片辺や姫津をわざわざ訪ねている。片辺(現相川町北片辺、南片辺)は、鈴木棠三(6)

佐渡一巡記　大正九年六月



図－1　1920年の旅における柳田の巡路
（── は陸路、┈┈ は船で移動、□ は姫津）
柳田国男「佐渡一巡記」1932より

が昔話の採集で顕著な成果を得た地域であり、その地域のことを柳田は鈴木から聞いて訪ねたものである[7]。

姫津は柳田の貴族院書記官長当時[8]の知人、佐次右衛門の居住地であった（写真－3）。姫津を訪ねた経緯について柳田は『島根民俗』[9]に次のように記している。

以前、貴族院の守衛に石見岩次郎という至つて篤実な後備の海軍兵曹だといふ男が居た。毎年議会の開期中雇はれて上京し、すむと挨拶をして故郷の佐渡へ還つて行くことが十数年近くも続いた。或年、佐渡の姫津といふ処から手紙をくれて、私も大分年を取りましたから、もう本年限りで東京行きを止めました。実は本名は佐次右衛門ですが、余りをかしいので、岩次郎と謂つて居りました。これからは本名を以てご交際を願ひますと謂つて、暑さ寒さには其の佐次右衛門からの状が来る。私はその前から浪人をして居て、とつくに上役でも何でもなかつたのである。あんまり懐かしいので佐渡に旅行をした際に（筆者注：一九二〇年の佐渡来訪の際）、訪ねたいがわかるか知らんといふと、あゝ姫津なら全部が石見だ。名前を謂って見ても外の人は知るまいとの話であった。石見から移住して来たので誰も彼も、明治になって皆石見を名乗つた。たびたび火事があったので書いたものは一つも無いといふ。私は是を聴いて非常に心を動かしたのだが、詳しいことを知らうとするには多少の用意がいると思って、却って此時には尻込みをして還つて来た。

―中略―

たゞ頼もしいと思ふのは、明治になってからまで全町が気を揃へて、石見を名乗らうとする心持ちであつた。或は静かに老人など

写真－2　1936年佐渡来訪時の写真
前列左から　柳田国男、中山徳太郎、松田與吉
後列左から　柳田夫人、青柳秀夫、山本修之助、稲辺弘
佐渡河原田　中山徳太郎別邸にて（中山友徳氏蔵）

写真－3　相川町姫津（平成14年）

のいふことを聴いて居たら、何が大きな刺激となって、こちらへ来ることになつたかの道筋ぐらゐは感じられるかも知れぬが、石見もどの辺から出たといふ様な、地名の記憶までを望むのは無理であらう。

柳田が姫津を訪ねた目的の一つは佐次右衛門に出会うことにあったものの、上記のように一九二〇年の旅の際、「姫津の石見といふ人を訪ねたいのだがわかるか知らんといふと、ああ姫津なら全部が石見だ。名前を謂つてみても外の人は知るまいといふ話であった。石見から移住してきたので誰も彼も、明治になって石見を名乗った。―中略―私はこれを聴いて非常に心を動かしたのだが」〔柳田　一九三八　二〕と、石見から姫津への海人の移住の伝承に強い関心を示している。さらに柳田は海人の移住について『島根民俗』に次のように記している。

元の村の名は知つても土地を想像することは先づ出来ない。従つて屢々誤つたり忘れたりする。日本海の沿岸にはところどころ、移住者に相違ない村があるが出処の国だけでも判って居るものは殆ど無い。相川にも姫津へ引越した者以外に海士町といふ者が今でも居るが、是などは後であらうのに身元がもう知られて居ない。佐渡にも越後にも海府という一帯の地域が、海人の開いた土地だらうと想像せられるが、住民は何れもそこで発生したような感じを持って居る。

この記述からも、柳田は日本海沿岸における海人の移動と定住の関係を想定し、姫津に特に関心を寄せたものとも考えられる(19)。柳田は、佐次右衛門の石見姓とその出身地とされる島根県との関係から、そこに海人の移住のあったことを見出そうとしたようである。「佐渡の海府」の中で、「元はやはり漁民として移住して来たものらしく、当初相川より少し南の、ドロと言う小さな浜に住み、姫津が相川の津になって後、保護を与えてここへ移したものらしい。石見が本国ということで全村ことごとく石見氏である。漁業に関して他

村の有せぬ特権を持っていたのは、多分はその歴史を語るものである」〔柳田　一九二〇〕と述べており、そこには海人の移住があったことを想定していたことがうかがえる。そしてさらに「佐渡の海府」で、海人の移住について次のように記している。

自分は地名から推定し得る海部土着の北の限線として越佐二国の海府の村々に、若干の生活上の特色を予期していたのであるが、今のところではそれが空想であったような感じがする。

さらに次のようにも述べている。

しからばそれほど無理な地方へ、海部が移住して来たと見るのが誤りではあるまいか。自分の推測は実は地名が元であって、他は後に心付いた力の弱い考証であるが、陸人に比べてはるかに移住心の旺んな彼等である。

―中略―

そうして機会さえ与えられるならば、彼等はこんな寒い国にでも、移って来る勇気を持っていたのである。

柳田は佐渡の海府という地名や石見姓などから、佐渡にも海人の移住によって成立したムラのあったことを推測している。そのことは、「そこで自分の仮定説を大胆に述べてみると、この島へもやはりある時代に、海部の漂泊者が辿り着いている。先人の見に捉われているのかも知らぬが、海府という名称は偶然には起こるまいと思う。第二にはこの種族の遠征力の旺盛で、現に日本海の多くの荒浜にも、別に政庁の介助などを須たずに、移住した前例のあることである」〔柳田　一九二〇〕といった記述からも、海人と佐渡の海府の地名などから海人の移住のあったことに強い関心を持っていたことがうかがえる。

二　石見佐次右衛門

上述したように、佐次右衛門は貴族院の守衛時代に柳田と知りあっている。佐次右衛門家に残る自筆履歴書（控えと思われる）には守衛になるまでの経歴を次のように記している。

履歴書

新潟県佐渡郡金泉村大字姫津廿三番戸平民戸主
東京市赤坂区溜池町廿五番地名畑泰蔵方寄留
石見　岩次郎
慶応二年七月七日生

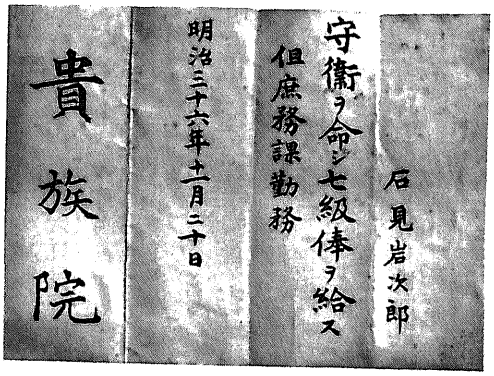
明治廿　年五月三日横須賀海兵団へ入団二等若水兵拝命ス　横須賀海兵団
仝廿一年七月九日練習ノ為満珠艦乗組ヲ命ス　仝
仝　年九月十三日一等若水兵ヲ拝命ス　満珠艦
仝　年九月十七日満珠鑑退艦仝日横須賀海兵団入団命ズ　仝
仝　年十月廿七日比叡艦乗組ヲ命ズ　横須賀海兵団
仝　年十二月一日四等水兵ヲ拝命ス　比叡艦
明治廿二年十二月一日三等水兵ヲ拝命ス　仝
仝廿三年　五月六日呉海兵団へ入団ヲ命ズ　仝
仝　年　五月四日比叡艦退艦
仝　年　仝月十日満期ニ付解隊命ズ　呉海兵団

外国航海

明治廿二年八月十四日　布哇、サモア、フイジ、クワモ等航海
仝廿三年二月廿ニ日　帰朝ス

戦時召集

明治廿七年七月廿日横須賀海兵団入団命ズ　横須賀海兵団
仝　年八月廿五日横団退団仝砲術練習所へ定員ニ乗組命ズ　仝
戦時中ノ勤務浮砲台砲員
明治廿八年八月十八日解隊帰郷ヲ命ズ　仝

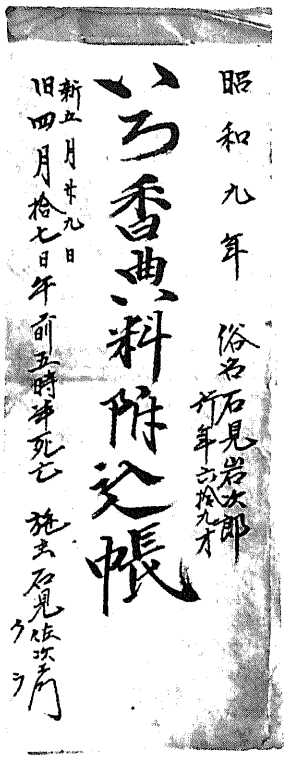


写真－4　石見岩次郎の辞令
（石見佐一郎氏蔵）

賞　与

明治廿八年拾月廿日　廿七八年戦役ノ功ニ依リ金弐拾五円下賜　賞勲局
明治廿八年十一月十八日従軍記章下賜　賞勲局
明治廿六年十一月廿日守衛ヲ命ジ七級俸ヲ給ス　貴族院
罰科ナシ
以上ノ通リ相違無之候也
明治三十七年四月十四日　石見　岩次郎

佐次右衛門は一八六六年（慶応二）現在の相川町姫津に生まれ、海軍勤務ののち退役後、一旦佐渡へ戻っていたが、やがて元上官の薦めで一九〇三年（明治三十六）から貴族院で守衛として勤務するようになった（写真―4）。一九一四年（大正三）三月には守衛番長補に任命されているが、同年一二月に辞職している。辞職の事情は不明であるが、それ以後は、議会開会中になると貴族院の臨時雇の守衛として勤務している。柳田が貴族院書記官長を辞した一九一九年（大正八）にも臨時雇の守衛として議会中は勤務しており、議会が終わるたびに佐渡に戻っていたものと思われる。臨時雇としての守衛を完全に辞めて佐渡に住むようになったのは大正末年頃と思われる。佐次右衛門家に保管されている「俗名石見岩次郎（佐次右衛門）いろ香典料附込帳」（写真―5）によれば一九三四年（昭和九）旧四月十七日（新五月二十九日）に満六十八歳で没している。柳田の佐渡来訪の二年前にすでに没していたことになる。



写真－5　石見佐次右衛門いろ香典料附込帳
（石見佐一郎氏蔵）

前述したように一九三六年の柳田の佐渡来訪は、佐渡の民俗研究家中山徳太郎[11]等の招請に応じてのものであった。一九三五年に開催された第一回民俗学講習会には新潟

県から小林存[12]や後に糸魚川から佐渡へ転勤となった青木重孝[13]が参加している。青木はその折り柳田宅に招かれ昼食までともにしているから、柳田から佐次右衛門について何らかの話があったことが想像できる。ところが、佐次右衛門とそうした佐渡の民俗研究家等との間に交流のあったことは全く見出すことができない。一九三六年に姫津へ佐次右衛門を訪ねた折のことが『石見民俗』に次のように記されている。

石見佐次右衛門は其後亡くなつた。さうして姫津の人の移住史はまだちつとも明らかになつていない。昭和十年（筆者注：昭和十一年の誤りと思われる）の夏、私は佐渡に再遊して、千代延君との問答を想ひ起し、今度は何でも佐次右衛門さんに逢ふのだと、意気込んで姫津に入つて行つたのだが、建てて住んでいたといふ家だけはあつて、残つて居る者は一人も無かつた。善人であるのにどうしてか仕合せがよくない。息子は先に死に孫は無く嫁は相川へ出て奉公をして居る。この新盆には帰つて来るだらうといふことだつた。袴などをはいて居た為に、是だけの事を聞出すのも漸くであった。

この記述からも、柳田は姫津に佐次右衛門を訪ねるまでその死去さえも知らなかった様子である。中山徳太郎を始めとする佐渡の民俗研究家等から、佐渡来訪時の柳田には佐次右衛門に関する情報提供は一切なかったようであり、こうしたことから佐次右衛門と佐渡の民俗研究家等とは何ら交流もなかったものと思われる。

おわりに

上述したように柳田は、佐渡の海府という地名から、海人の移住とそれによって成立したムラのあったことを佐次右衛門の石見姓などから見ようとしていた。

松本三喜夫氏は、「『北小浦民俗誌』と『海上の道』とは、同一のテーマに対して地理的、視覚的にみて、南と北という対角的位置からのアプローチであることがわかる」〔松本一九九八　一九五〕と述べている。柳田の著した『北小浦民俗誌』が『海上の道』へとつづくものであり、日本人の移住先としての日本海側に目を向け、それを明らかにしようとしたものが『北小浦民俗誌』であるという。『北小浦民俗誌』の記述をめぐっては今後も論議されるところであろうが、柳田の佐次右衛門への関心の一つは石見という姓と海人の移住したムラという観点ではなかったのかと想像するものである。

付記　石見佐一郎氏の所在は、相川町役場の浜野浩氏のご教示によって判明したものである。また、石見佐一郎、スエ子の両氏、佐次

右衛門の孫にあたる山本与四郎氏からは資料の閲覧等についてご配慮を賜った。記して感謝申しあげる。

【参考文献等】

池田哲夫　一九九七「柳田国男と地方の民俗研究家」『日本民俗学』二一二号
鈴木棠三　一九八七「佐渡採訪記」『夕鶴の碑建設記念誌』夕鶴の碑を建てる会
福田アジオ編　二〇〇一『柳田国男の世界―北小浦民俗誌を読む―』吉川弘文館
松本三喜夫　一九九六『野の手帖―柳田国男と小さき者のまなざし―』青弓社
松本三喜夫　一九九八『柳田国男の民俗誌―『北小浦民俗誌』の世界―』吉川弘文館
柳田国男　一九二〇「佐渡の海府」『歴史と地理』一九八九『柳田国男全集』第二巻　ちくま文庫所収
柳田国男　一九三二「佐渡一巡記」『旅と伝説』一九八九『柳田国男全集』第二巻　ちくま文庫所収
柳田国男　一九三八「石見佐次右衛門」『島根民俗』島根民俗学会
山本修之助　一九七二「来島の民俗学者」『佐渡の百年』佐渡の百年刊行会

(1) 一九四九年（昭和二十四）に、柳田が倉田一郎の遺した採集手帳をもとにして著したとされるもので、近年、この民俗誌の記述をめぐって多くの論議がなされている。ここではこの点についてはふれない。福田アジオ編『柳田国男の世界―北小浦民俗誌を読む―』二〇〇一参照

(2) 一九二〇年六月の旅を終えて間もない八月に著したもので「後のために小さな記録を作っておこうと思う」とある。

(3) 一九三二年(昭和七)一〇月に柳田が著したもので、「古い佐渡の旅行の忘れ残りを、今度入用があるので試みに書きつけてみる」とある。

(4) 一九三六年（昭和十一）七月七日から十日まで三泊四日の旅程で、佐渡の民俗研究家であった中山徳太郎・青木重孝らの招請に応じ、夫人を伴い佐渡へ旅をしている。このとき佐渡在住の郷土史家や民俗研究家と親しく歓談したり、「妹の話」と題した講演を行っている。〔山本　一九七二〕

(5) これらの経緯については、拙稿参照。

(6) 一九一一年静岡県に生まれる。柳田国男に師事した民俗学者で、著書に『佐渡昔話集』『なぞの研究』等がある。佐渡には一九三六年四～五月にかけて滞在した。それは柳田の二度目の佐渡来訪の三か月前にあたる。

(7)「私が、あまり片辺の話をするものだから、柳田先生までがわざわざ松屋を訪ねられた(筆者注：一九三六年七月の佐渡来訪時)。―中略―「君が泊まった松屋というのを見てきたよ」と、突然先生が言われた時、私はまさか、と思った程だった」〔鈴木一九八七　一四〕

(8) 柳田は一九一四年（大正三）から一九一九年（大正八）まで、貴族院書記官長として在職していた。

(9) 島根民俗学会の機関誌。一九三八年（昭和十三）九月の創刊号に柳田が「石見佐次右衛門」と題した巻頭論文を寄せている。

(10) 松本三喜夫氏は柳田の佐渡への旅について『柳田国男の民俗誌』で次のような見解を示している。

「柳田国男の昭和十一年（一九三六）の佐渡の旅は、倉田一郎の佐渡の海村調査に先立ち、自分の目で見、耳で感じる予備調査とでもいうべき旅であったといえる」〔八五〕「大正九年（一九二〇）の佐渡への旅、昭和十一年（一九三六）の佐渡来訪、そして昭和二十四年（一九四九）の『北小浦民俗誌』の刊行へと、柳田が佐渡の研究に長くの時間を費やしたのも、それはひとえに『北小浦民俗誌』でのべようとした内容と問題の大きさ故であった」〔一九八〕

(11) 一八七五年（明治八）河原田町（現佐和田町河原田）に生まれる。同地で産婦人科医院を開業するかたわら柳田国男と親交をもち、佐渡において民俗学発展のために尽力する。著書に『河崎屋物語』などがある。一九五一年（昭和二十六）没。

(12) 新潟県における民俗学の先駆者として知られる。一九三四年（昭和九）に高志路会を組織し、一九三五年（昭和十）に機関誌「高志路」を発行する。著書に『県内地名新考』上・下などがある。

(13) 一九〇三年（昭和三十六）新潟県糸魚川市に生まれる。第一回民俗学講習会に参加。その直後、佐渡の河原田高等女学校教諭として赴任。中山とともに佐渡の民俗調査に奔走する。著書に『佐渡年中行事』等がある。一九九三年（平成五）没。